

風 韻

第 11 号
(一九七一年度)

神 戸 大 学 風 韻 会

風韻 第11号 目次

◎五十年の体験(その六) 師 範 宇治 正夫 ... 1
 ◎変わらざるもの 会 長 藤井 茂 ... 3
 ◎先輩登場 5

| | | | |
|-----------------|------|-----------|---|
| 東京凌霜謡会の現状 | 昭4年卒 | 安村慶次郎 ... | 5 |
| 風韻会雑感 | B 9 | 原 敏郎 ... | 6 |
| 雑 感 | E 13 | 段野 治雄 ... | 6 |
| 謡友・酔友 | J 15 | 尾島 洋三 ... | 7 |
| 最近思うこと | E 17 | 湯浅 憲之 ... | 8 |
| あれやこれや | E 18 | 中島 克己 ... | 8 |

◎誌上研究 10

| | | | |
|-----------------|------|-----------|----|
| 観能雑感 | B 20 | 河野 豊 ... | 10 |
| 能をみて | S 21 | 下田美保子 ... | 13 |
| 謡曲にみえる特殊な発音について | B 22 | 山口 剛 ... | 14 |

◎自由投稿 16

米田 耕三(B20) 中村久美子(B20) 長沢 洋一(J22)

◎走馬燈 19

根岸 義明(E19) 岩本美代子(P19)

加嶋 文子(P19) 賀川美恵子(P19)

◎昭和四十五年度風韻会活動報告 22

今年の活動を顧みて E 20 福田 啓介 ... 22

関西学生能学連盟での活動報告 B 20 山本 秀人 ... 22

◎あしあと 昭和45年度 24

◎幹事長就任にあたって J 21 木村富士夫 ... 26

◎名簿変更通知 27



葛 城 大和舞 宇治正夫
 昭和45年12月13日 於大槻能楽堂



秋季発表会
(昭和45年11月21日 於学生会館)



春合宿
(昭和46年3月6日 奥津にて)

五十年の体験(その六)

師範 宇治正夫

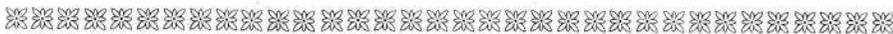
この頃「程々に」という言葉を、身にしみて感じるようになった。「過ぎたるは及ばざるが如し」とは子供の時からよく聞いた言葉である。大体の意味は似通ったものと考えるが、程々にという言葉はなかなか味のあるものに感ずるのである。しかし私はこの程々に、ということがとても苦手である。又しても足りないか、過ぎることに気が付いて、我ながら恥かしく思うことがしばしばである。

例えば、会の前になると、社中の方々にそれぞれ大役をやっていただくため、熱心に稽古をつけるのであるが、だんだん熱が入ってきてやかましく直すうちに思わず声が強くなったり、言葉つきが荒らなったりして、ご婦人方は遂に泣き出されたりすることが幾度かあった。その代り泣き泣き続けられた方は、人が変わったように上達されるので私も嬉しくなるのであるが、泣かれた時は申し訳ない思いで一杯である。これについて今でも忘れ得ない経験が

ある。三十年余り前のこと、ある銀行支店長夫人の稽古で杜若のシテであったが少しむつかしいため、厳しい稽古をしておったところ、突然その夫人が顔を上げて、「先生私は楽しみに謡を始めたので、そんなにむつかしいことを云われるのは心外です。只今限り先生の稽古はお断りします：」と云われ、その場に居合せた方々はあっけにとられたかたちであったがその方々が色々となだめられ、収拾に努めて下さったが、どうしてもきかれず、白々しい思いのままにお別れのやむなきに至った。

又、ある時、神戸有教会社の重役夫人が「金はいくらでも出しますから、早く上手になるように教えて下さい」と云われて、今ならばもう少しおたやかな返事が出来たであろうものを「金はいくらもお出しになってもご自分で努力なさらねば駄目です」とにべもなく突っぱねて、幾分自分が誇らしい気持を持った事は、まことに智慧のない恥かしい次第と年経るに従って、感ずるようになった。

以上二つの例は、私の生涯を通じて忘れ難い事であるが、いづれも芸術のきびきびと精進の苦しさを示しており、その反面これを初心の人に伝えるためには順序と方法があることを教えている。初心の人々にもよく納得のいくように教えるのが勤めであり、今であれば論し得る自信もあるが、よく考えるとそれも教える者の未熟な故であって、斯様の事態にまで追いつめることなく、その寸前に、相手の気持を察し、そこに程々という極意をさわめねばならぬと、深く省りみる次第である。



変わらざるもの

藤井茂

一
万物は流転し、物象は変化する。進歩といい、発展というのはずべてこの流転と変化を捉えた概念にはかならない。もし一〇〇年前の人が東京駅前に立ったとすれば、余りの変り方に気絶するかも知れない。ニュートンが今日の物理学書を読んだら、その何分の一を理解しうるであろうか。余り変化していないといわれる経済学においてさえ、ミルやマルクスが今日の事象を前にすれば、その原論や資本論に訂正加筆を申し出ることであろう。

しかし、事物は刻々に変化し、あるものはうたかたのごとくに消え、あるものは巨獣のように膨れて行く。人の心も同じように、昨日の重要関心事も今日は些末のこととなり、ときに価値観が転じて物を見る目が一変することさえある。一昔前の者は「今の若い者はいい、若い者は「年寄りには解らぬ」などと口にする。断絶という言葉がこれをあらわしており、今のめまぐるしい変転を前にしては、過去を振り返る目と、未来を見渡す目との間には確かに断絶

がある。

しかし、変化は古いものと新しいものとの断絶を意味するのである。飛躍は連続性をもたないものなのか。今日の物理学も引力の法則は否定していないし、現代経済理論も古典学派の理論を無視しては語れない。変化や進歩の背後に変わらざるものがある筈である。変化や進歩がはげしければはげしいほど、この変わらざるものがあることが重要であり、これを見つめる眼が要請されるのである。

二
わたくしはこの変わらざるものを求めて、その典型的のものを謡曲に見出す。七百年の昔、観阿弥、世阿弥が作ってからのかた、文章も節も舞の振りもそのままに伝承されていることは驚異すべきことである。なるほど、中には廃曲になったものもあり、新作もある。細部の表現については変化もあり、能の小書のように変化を求めた節もある。しかし、新作といっても楠露が一番新しいとされており、

それ以後の作は生命を保たなかった。戦争中に作られた義経や御戦船、忠霊なども同じ運命を辿った。観阿弥や世阿弥が今の能を見ても、舞台や照明こそは変わっておるとしても、能そのものが変わっていないのに驚くことであろう。

これには創造者達の卓越した創作力と、代々の伝承者達がきびしい掟のもとに原形の保持に努めてきたことによるところが大きいであろう。しかし、逸してはならないことは、謡曲や能が人間の心そのものにふれていることで、時と所によって人間の相は変わっても、人間の心そのものは変らなかつたことを意味している。至高の芸術といふべく、いついかなる人もこれによってみづからの心を養い、またみづからの心によって芸術を高めて行くのである。謡や能はその表現形式の変わらないことが、これを味わう心を深めるのに役立っており、心の深まるにしたがって、同じ表現形式の中に無限の変化を観じるものといえよう。

自然音に擬した原形音楽の中に陶醉の境を見出す現代の学生の中に、これとおよそ対極的な謡曲に打ち込む者の多いことは、謡曲が現代の若人の心にもふれるものをもっているからであり、受身的な陶醉ではなくて、みづからの努力によってみづからの心を高める道を求める若人の多いことは、人の世に断絶はないことを示しているといえるであろう。

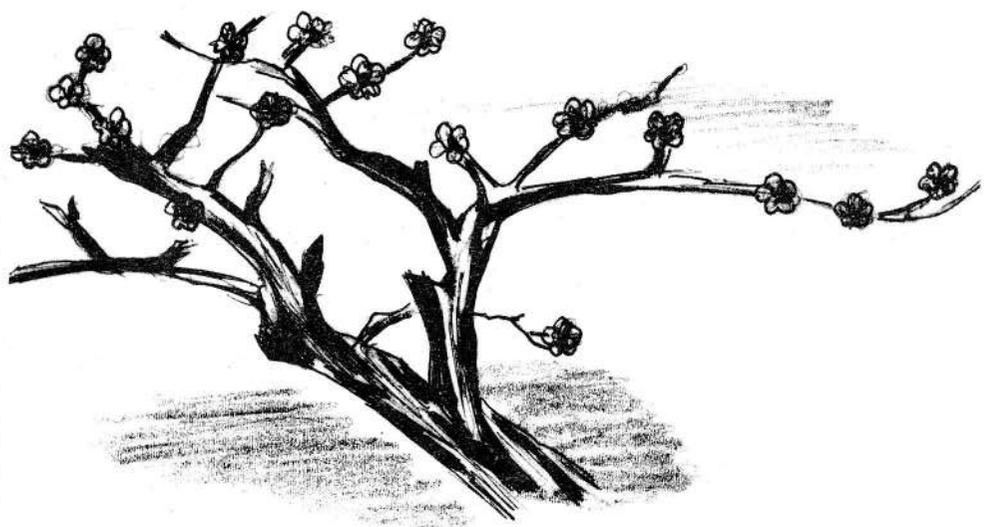
先輩登場

東京凌霄謡会の現状

昭和四年卒 安村 慶次郎

東京凌霄謡会の幹事をしていて関係で風韻会の顧問（東京側）を仰せ付かっているので当会の現況をお知らせする。

当会は初代幹事音申吉氏（明治四五年卒のヒマラヤ会員、日本毛織、東洋パルプ、昭和三七年逝去）が戦後満州から引揚げて来られ、暫く経ってから主としてヒマラヤ会員よりなる同好の諸氏と共に始められた素謡及び囃子の同好会に源を発し、逐次後輩の凌霄会員が集まり、二代目幹事高田透氏（大正五年卒、三井物産、中村機械貿易、昭和四一年逝去）の頃には会員数二十数名を数えるに至った。四十一年末高田透氏急逝の後、西村二郎氏（大正七年卒、山下汽船、山和汽船）が三代目幹事に、昭和四十四年より小生（昭和四年卒、日立製作所、日立クレジット）が四代目の幹事を承っている。二代目高田幹事の時より会長制をとり会長に白井経倫氏（大正四年卒、三菱商事）を仰ぎ今回に至っている。会員は正会員四一名、特別会員三名（初代幹事音申吉氏の日毛時代の僚友如水会員沢木正太郎氏



等当会有縁の人々）合計四四名が現在会員であり、中に前記二代目幹事高田透氏未亡人尚子さんを始め、婦人会員も六名含まれている。演能経験者は三名、高田夫人の如きは十回以上の経験者であり、小鼓、仕舞の名手でもある。

会員数は前記の様に五十名に近いが現役の人も居り、月々の例会出席者は大体十五名前後であり、新宿区西大久保の出光寮（迎賓館、出光佐三大先輩のご好意による）で素謡五番立て（他に独吟、一調、仕舞、居囃子等あり）の例会を催し晩餐を共にして交歓する。他に一年に一回程度、箱根、富士五湖辺りに遠出の謡会をやる。又、毎月例会報を発行して会員の消息を伝え諸連絡に当てている。

当会の最大の悩みは学部卒会員が意外に少ないことであり、現在五名を数えるのみである。即ち、風韻会出身者が少なく、大部分は高商時代の鞍馬会（伊勢普宣師指導）を巣立って来た人達である。新人会員、青年会員に続々入会してもらわないことにはやがて老人クラブになる心配がある。風韻会の諸君もお勤め先が京浜地区になる人、なった場合にはどうか挙ってこの東京凌霄謡会にご入会願いたい。

当会の技術水準は公平に見て素人の会としては一流中の一流と言えし、玄人の先生には望めぬ常識又は学識の持主が多く、単に謡を楽しむだけでなく人間修練の、人間完成の場と考えられて今後に於ける新会員の入会を望むや切なるものがある。月々の例会報ご希望の方には東京附近在住の方はもとより地方の人にもお送りします。

今年も又風韻会卒業生歡送会が近づいてきた。誦会に続くコンパ、卒業生にとっては、風韻会生活の数々の思い出が、一度に甦る忘れられない春宵であろう。吾々9回生の頃迄は、校門の手前にある古い学生集会所で誦会をやり、引続きそこでコンパを行った。その後、誦会だけ学生集会所、コンパに平和楼という組合せがしばらく続き、このところはずっと学生会館である。学生会館の立派な舞台で誦会でも、観客席がまばらというのはいくらも淋しい。その点、豊敷きの学生集会所は、誦う人と聞く人が至近距離だけに、誦う人は緊張するし、聞く者も私語できず、びりびりとした感じがして学生にはふさわしい誦会の場所であった様に思う。それからコンパ、これもやはり椅子よりも畳がいい。送る者、送られる者が互いにひざをつき合せて杯を酌交す。藤井先生のノゾキ節、米花先生の召集令状と各人のおはこが出るところで、ムードが最高潮になる。そんな席で卒業していく者は、下級生に託す風韻会のことがちよびり気になる。自分達の頃は盛んだった風韻会が、ひょっとして解散でもするのではないか。部員の数は、技術レベルは大丈夫かなどと思う。親がいつまでも子供だと心配するのに似た気持か。

然し卒業して10年、招待状をもらう度に顔を出す風韻会は解散するどころか益々盛んである。吾々の頃は仕舞までだったのが今ではこれ以上に魅せられ引かれるもの。それは在学中苦楽を共にした同窓の者との交わりといえましょう。何んといっても各人の良きも悪しきも知り合っていて今さらカライバリもエンリョもなにも通用しないのですから。少ない人数で、東京から九州まで働く場所が散らばっていて平素の交流がないのはさびしいのですが、誰かの結婚披露宴には必ず殆んどが出席し互いに祝福し合い席上そのことほぎを誦にして表わす、これが恒例になってしまいました。しかし結婚式は一人一回、とすれば「結婚式」をあてに集合する機会もなくなるわけで現に今年限りとなります。あと何かこじつけでよいから良い理由はないものかと思案しております。

その人その人によって立場は違うのですから能・謡曲との交わりの具合は大へん異ってまいります。私などは以上のように最も速のいてしまった者でございます。しかしこんな最低の私にも、一度大風韻会の門をくぐり多少なりとも教えを乞うた者として能・謡曲の世界から脱け出すことは出来ません。これは確かなことです。もはやそれは心のささえ心のふるさととなっているのです。大学の風韻会の皆さんにつねに感謝している次第でございます。

「行動なきところに真の思想はなし」との論理からすれば、能も観ず誦わざる者は風韻の人たり得ず、ということになります。そのとおりかも知れません。しかし「能」「謡曲」そのたと言葉だけけり私の脳裡にある限り能の世界とは無縁たり得ず、従って決して大学の風韻会の皆さんから「資格なし」として追っばり出されることはないし自己安心し、仕事にはげんでいるこの頃です。(完)

舞囃子までこなす様になっている。部員も女子を含めて多い。そしてうれしいことには、学生諸君の誦を聞いてみると風韻会の伝統の様なものを感じる。宇治門下生としての共通の何かを見出すからであろう。宇治師範、藤井先生、荒川先生、米花先生、福光先生と皆様お元気で学生の指導に当たって下さる限り、私にとって風韻会はいつまでも心のふるさととなるだろう。

雑 感

E13 段 野 治 雄

昭和四十年春の卒業から今春で満六年になります。経歴からいえば最初の五年間が銀行の貸付畑を歩み、あとの一年を現在、父と共に昆布の卸商を営んでいます。少々時間にゆとりのできた現在、いろいろと考えてみますと、卒業後正直のところ「大学風韻会」「謡曲」とあらたまって考える、接することのない年月でした。毎日の仕事とそれに伴う疲労、そして明日の糧を求めての勉強という前には、「能」の世界もただまぼろしのように消えうせておりました。しかし時々「能」の世界へのノスタルジアをかきたててくれるものがやはりありました。大学風韻会からの便り、風韻会からの催しの案内、クラブ仲間の便り等々。いろいろな催しの案内をいただいても、平素の無沙汰(皆様方へのそれだけでなく謡曲そのものへの無沙汰も含め)と自らの能力のなさにいつい足が遠のくばかりです。そんな中でやはり多少の抵抗はあってもそ

誦友・酔友

J15 尾 島 洋 三

卒業以来はや四年、宇治先生、藤井先生はじめ諸先輩、同輩、後輩の皆様には御無沙汰つづきで誠に申し訳なく、紙上を借り深くお詫び申し上げます。

昨八月、京都より東京事務センターに転勤、現在電算機のプログラミング及びシステム開発の仕事にあけています。京都時代には月一、二度謡曲の練習もやっていたが、こちらへ来てからなかなか余裕もなく、又機会もなく残念乍らと出来ぬ有様です。

昨日、かつての誦友「今や酔友の仲間達」松村、森本、金沢の諸氏と久方振り旧交を温め四方山話に花を咲かせました。四年もたつが誰も皆そう変わりもしていない事に驚き、かつ安心し、かつ進歩のなさを慰めあったものです。風韻の諸氏「誰それの噂話や目下の恋人のこと、やれあの三宅氏にはや子供ができたとか、あの先輩はまだ独身を守ってるそうだとか」誠に女性週刊誌的な話題で夜をふかしたあげく、次回は来月、わが家で大誦会を催そうということに落着き、やっと終電車に乗った次第です。東京には結構、風韻の同窓諸氏がいるようで、是非一度乗りたいと思っています。

みんな誰か号令をかけてくれないかな：：と思っているんでしょね。いつでも集って、誦えた学生時代をほんとに懐しく思い出すこの頃です。(一九七一年・二)

最近思うこと

E 17 湯 浅 憲 之

卒業して、早丸二年になろうとしています。最近はじつくりと腰をおちつけて自分を反省する余裕もなく、バタバタと毎日を送っております。私の今の仕事は会計業務です。伝票式会計でバランスシートを作っております。又、現在は伝票式会計より機械式会計への移行段階で、こちらの方へも気を回さねばなりませんので、のろまな私には少々荷重です。さて、私の大学時代はどうであったかとふりかえってみますと、それは速く、断片的に、おぼろげにしか心からつてきません。このことをある友人に話しましたところ、それはお前が四年間をなまけて過したからそれだけ記憶に残るものが少ないのだからと逆にやり込められました。この言葉は私の心につきささったトゲのようにうずきます。適当に単位をとり、適当に遊び、適当にクラブに参加しておりました。あの学生運動に対しても毅然たる態度がとれなかったということについても前の言葉は的を得ていると思われまます。確かに、学生時代は自分自身に対して厳しくなく、自分をあまやかせていたことは事実です。しかし、私はその頃他人が分りませんでした。今でも決して他人が分るというたものではありませんが、何故あの人達はあのように考えるのだろうか、あの人の口からあのような肯定的な(あるいは否定的な)結論が出るのだろうかなどとよく考え込みました。そしてその意見の前提とな

いただけなのかも知れないが：。

入社とそして会社生活。学生時代の想像は、あくまで想像だったことを知り、いかに他人の立場で考えることが容易でない事知らされる。近況はといえば、会社では午前中は机について事務、そして午後からはブイと出て帰社は五時頃といった具合で、健康のいかに大切かと思う。扱ひ商品は建設機械であるが、昨今の不況感を反映してか、業界は今ひとつ明るくない。大学時代は、経済学部にはあった私だが、公定歩合等のほんのわずかな操作が、かくも経済界を混乱させるものとは、まさに今迄思ひもよらなかった事である。西の宮の寮生活。一人部屋はいいのだが、どうも静かすぎて、国維寮の、あの午前二時までは夕方であるといったムードが、これ又懐しい。近いせいか、休日ともなれば、なんとなく神戸をブラつたのが習慣となり、そしてその時は、大学時代に戻った様な錯覚に陥る。修行不足のせいだろう。今の率直な気持は会社生活はしんどいが、会社はおもしろいということ。あと四〜五年もすれば会社生活は慣れてなんともないが、会社はしんどいという事になるかも知れない。現在の処は、そうならぬ様、あがくだけ。

先日は、新年会と称して、十八回生風韻会男子で集まり、例によつて楽しく過ぎて頂いたが、友が皆我より偉く見ゆる日よといった思いで、毎晩飲んだくれてる自分を恥じた次第ではあった。今後共、同期の友人だけでなく現役の方々とも時々あいついた時間をもたせて頂き、自分を反省することができればと思う次第です。末筆ながら、神戸大学風韻会の皆様、諸先生方の御健康と御活躍をお祈り致します。

っている諸条件を分析しました。しかし、今思えば、人の性格やその社会環境を分析したり、問題点を探ったりするだけでは十分ではないのだと分ってきました。その上に立って自分なりの何らかの結論を引き出し、それをアクションに結びつけるということも同様に大切な態度だと思ふのです。従つて物事を考える時には、何かより良い、生産的な結論を引き出すとする態度でなければならぬと思ひます。時には、安っぽい結論で人に笑われるかも知れませんが、その時ははずかしさ、みじめさには負けてはならないと思ひます。寒さは、まだまだ厳しそうですが、空はすでに春の兆を見せているのか、大分明るくなってきました。青く美しい空を眺めていると心も自然に凪いできます。暖かくなればどこかへ友人と旅行をしようと思つております。以上のようなことをいろいろと考えている今日この頃の私です。

あれやこれや

E 18 中 島 克 己

大学と、そして何よりも風韻会を出てからもう十ヶ月。あれ程通つた部室を、もはや我物顔で使えない事が、入社してしばらく経つまで鈍い私には理解できなかつた。諷いも、時々観能会に出るくらいで全然である。懐しいといえは、秋、ポプラ並木の校庭から漂つてきていた例の風韻ソングは、今でも心温まる。そして、串カツ屋、こちらへは今でも時々通つては古きを温めている。要するに飲みた

舞台撮影・婚礼スナップ・茶席華道
出張撮影
商業美術写真・複写・カラープリント

川上写真研究所

神戸市灘区森後町2-1-64
電話(85)4915

喫茶
軽食

ベンガル

神戸市灘区六甲台町(神大前)
電話(87)5622

長谷川吉郎 産・婦人科

六甲マタニティクリニック

入分 術院

診療時間
A.M.9:00~P.M.1:00
P.M.5:00~P.M.7:00

阪急六甲駅浜側
東(徒歩7分)
市バス石屋川
車庫一筋西上る
☎85-2945代

誌上研究室

観能雑感

B 20 河野 豊

今日、十二月、カレンダーも最後の一枚になって三日め、四年生が十二月十五日までに何か原稿を書いて出せと言つて来られた。後二日で秋期学連発表会、舞囃子「班女」を舞うことになっている。佐伯君よりは数ヶ月早く六月頃から中之舞をやり、師範に型付を書いて頂きテープ・レコードと買いそろえたにもかかわらず、まだ満足の行く状態でない。今更ながら、今まで舞囃子をやってこられた諸先輩の御心中、御推察申し上げる次第であります。さて、表題「観能雑感」は、年の暮も近づき、今年見た能を振り返つてみたいと思つていたこともあり、さしあたって話題となるのはこれしかないもので、非礼をも顧みず言いたいことを書くことにしました。まず、僕が始めて自分から進んで、お金を出して能を見たのは、我が尊敬する佐伯君より遅れること数カ月、去年の十

二月の京都観世会例会に始まる。「頼政」とお家元の「江口」で、後者はあまり興がのらなかった、前者のとき既に二回目だったと書いてあるから、おもしろさが解らなかつたのかも知れない。唯、京都観世会館は学生を二階に押し上げるので、面や細かい所作が解らず、面白くない。しかし、この京都観世会館が好きになり、以後、観能の拠点と定めるに到つたのは正月元旦の謡初式であった。正月の寒い何か気のひきしまる様な朝、観世会館に着くと、広い見所に十人程しかいなかった。能舞台には鏡餅とおみきが供えてあった。そのおみきを見所にいる人皆がいた。あの酒のうまかつたこと。おしいたいてすつとしたところに、「高砂」「羽衣」の舞囃子。あの神舞のすがすがしき、太鼓序之舞の華やかさ、このとき、心に固く誓つた。さつと「高砂」を舞つてやるぞと。最後の祝言、四海波は、舞台いっぱい各一門がならんで壮観だった。もうすぐ正月だが、又行くつもりだ。さて、今年始めての観能は観世会例会で、最長時間の記録、朝から晩まで昼夕食共に抜いて七時間十五分、この記録は未だ破れない。最後の「岩船」は頭がガンガンして死物狂でがん張つた。「田村」博太郎氏がよかった。茂山千五郎氏の三

番叟は抜群だった。しかし、二、三月と大学も忙しくなり風韻会もごたごたして能に行く暇なく「弱法師」「望月・古式」などが見られなかつた。四月になるとついに学生席では飽足りず、大枚千五百円を出して一般券買い、一階の一等席で見る。分林氏の「花月」、鏡之丞の「実盛」博太郎氏の「楊貴妃」、浦田氏の「藤戸」とどれもすばらしい名舞台だった。しかし、難を言えば鏡之丞の「実盛」は少し古い込みすぎで武人らしさが感じ難かつた。「楊貴妃」で始めて序之舞のすばらしさが解り始めた。それまでは、師範の「枯若」「野宮」を見ても眠たいだけであつた。少し目が肥えてきたのかなと思つた。今一度師範の本三番目物を見たい気がする。「藤戸」は浦田氏の好きな曲らしく、以後何度もプログラムで見るのだがワキ方も江崎金治郎となかなか上手な人で語の「二刀刺し」の所作などするどい演技をしめした。以後四番目習物を見て確信するのだが、

数十四番、六回能会に行つた。まず京都新能では、「張良」友雪氏がよかつたが、杵を目附に投げる後見の重き習は大したことなかつた。後見は片山慶次郎氏。張良はワキ中心と云われているが、岡治郎右江門氏、流れ足などかなり面白かつたがそれだけのこと。金剛の「半部」六月とは云えど未だ夜風は冷たい中、スポットに照らされて半部屋の中に女性一人、寂しくも晴れやかな風情、「草の半部押し上げて」あの場面、未だ眼前に浮かぶ、当日最高の能であつた。しかし序之舞がなかつたのは残念だった。やはり新能はシヨオであり一人じっくりとみるノオではないようだ。

浦田氏の好きな曲らしく、以後何度もプログラムで見るのだがワキ方も江崎金治郎となかなか上手な人で語の「二刀刺し」の所作などするどい演技をしめした。以後四番目習物を見て確信するのだが、クセがこの曲から好きになつた。何しろ何でもいから、膝を打つてかかるところで僕の心臓は最頂点に至るのである。たしか藤戸では「ありがひもあらばこそ」のところがそれにあつていたと思つたのだが、今確かめてみると「亡き子と同じ」と形付に書いてある。興奮してワキへ向いて膝を打ち立ち上がるまでの時間の経過を忘れてしまったものと思われる。しかし後ジテの所作は好きではない。「刺し通し、刺し通さるれば」の所作はリアルにすぎてゾツとした。五月は三大学、僕は病気のため行けなかつたが、ホームで皆を見送つた後、家に帰つてすぐ結石がおりて快復したのは、今思つても残念である。

さて六月になると、また新しい最高記録が生まれた。月間観能番

次に片山定期会大槻清韻会、杉浦定期会、林定期会と各会しらみつぶしに見て回つた。雲林院を二度、安達原を二度見るほど重出曲の多いときであつた。しかしこのときの雲林院は私にとって二つの意味で重要であつた。一つは、能の見方が決まつたこと、最初の一回は、全体をざつと見通し、おおよその感じをつかみ、二度目は、その曲の要所を、三度目には更に全体を、四度目は本無く自由に見る。この私なりの能の見方は「熊野」「葵上」の如き類出曲でますます確立していった。次にもっと重要なことは、老人の前シテが好きになつたことである。これは位というものが解り始めたということになるのではないかと思ふ。以後、頼政、忠度、養老、融等の尉の前シテ好きが確立するなかでも私の最も好きな所は、呼掛、一声、初同、中入地である。と書けば全てになってしまうのだが、老人の花を慈しむ心、これが僕の最も好きな心持であり、雲林院、忠度の前シテは僕の最も好きな主人公で、後ジテの麗やかさよりは寂しき静けさの中の心の暖

みが好きなのである。そして今まで好きであった激しい能、きれいな能には興が乗らなくなってしまう。そしてそのとき始めて、弱法師の花を袖に受くる態や上歌の気持がしみじみと思いやられてくるのであった。雲林院で能の幽玄美を知った後すぐに弱法師、遊行柳を見る機会を得たことは幸運なことであった。しかし未だこのときでさえ遊行柳の序之舞は解らなかつた。舞の良さが解り出すのは後に中之舞を師範にお教え頂き、笛の譜、レコードと取揃え毎日のように囃子を聞いてからのことであった。そしてこの月最後に、梅若猶義の班女を見たが、学連の能楽観賞会は、学生を冷遇しており良い席は殆ど無く二階最後列で見た。よかつたと思つてあるが、どれだけ見えたのか心もとないものである。

七月は「女と影」に始まるが、下らぬのでやめる。所作に無理多く、詔に意味の展開が少なかつた。テーマ自体は大したことなし、京都若手能も値の割には大したことなく、余り能を見なれぬ人が見るべきものであろう。熊野の短冊を書くところ、そつけないさすぎてもう少し何とかならぬものかと思つた。

八月は大坂新能、これもショウウでショウウなりの面白さはあつたが能本来の面白さは見られなかつた。わずかに経正・替えの型で感じられたぐらいで、面白かつたのは、菊慈童。

京都の納涼能もシロウト受けするように、居グセ・舞みな省いてあり面白くなかつた。残つたのは骨組みだけ、肉は皆削り取つてあり、油を抜いたサンマのようなもの。良かつたのは養老の後ジテ、神舞の清涼感、鶴飼の前シテだけであつた。

九月は杉浦定期会、このときの花月は今でも忘れられない。シテ

は、師範のをよく練習場でお聞きしているので、耳が肥えているのか、単調でつまらなかつた。盛久は恐之舞の小書附だつたが、やはり男舞は恐之舞がつかぬと面白くないものだ。

十月は 三輪(白式) 藤井楽人・に始まつた。白式となると何から何まで変つて、まさに異曲の如きであつた。後日の能評に、「神の悲しむところで面をフスが、その時涙の流れるのを見た」と書いてあり、今でもあの重厚な舞台は忘れられない。あのようなすばらしい能が無料で、しかも多数の案内状を下さつたにも拘らず、当のクラブから僕一人しか行けなかつたのは、何とも惜しい話である。

そして今年最高の京都観世能。これはさすがに値もいだけ、どの番組もすばらしかつた。梅若六郎氏の「俊寛、落葉の伝」、杉浦友雪氏の「卒都婆小町」そしてお家元の「舟弁慶、重キ前後之替」と番組を書いただけで、名舞台が想像されようというもの。今こゝでその名舞台ぶりを述べるつもりはない。どう表現してよいのか解らぬから。ただ俊寛については、自分で、あのクセを今一度再現しえたらという思いのみである。そしてこれまであまり好きでなかつたお家元の能が、一度に好きになつたのもこの会である。そして何よりもの収穫は、姉の気品のある美しさを知つて後、僕の女性美の感覚は大いに変わった。若い女性のはれやかな美しさより、おちつきのあるしつとりとした老女の美しさの方が、厳選された、時間を越えた、打ち勝つた、単なる容姿を越えた心の美しさを感じられるのである。

十一月は文化の日に、清韻会別会にて「半菰」を見た。は、囃子がうるさくて充分観賞できなかつた。以後、太鼓の山本孝

方杉浦元三郎氏、このときの後見が岡田すみ子さん。彼女なかなか美しい人で、花月を見ずに後見ばかり見ていた。さてその岡田師が井筒をやつたのだが、面が大き過ぎたのか、あごが面からはみ出ぬため、ひきしまった感じがせず何かツレの如く位が低く感じられた。この会を最後として、多数乱見からいいものを数少く見る方針に變つていった。そして最初につかつたのが、離見会であつた。離見会とは、片山三兄弟の主催する会であるが、三人の中でやはり博太郎氏の定家が一番すばらしかつた。予想していたより後ジテは美しかつた。といつても靈女特有のげそつと頬の肉のおとろえ、下歯を欠いた口は力なく「弱々しげ」という表現を超えて陰惨な感じがした。しかし面につやがあり何か美しくも不可思議な舞台を創り出していた。今思えば、ワカの後など葛城と似ているが、葛城の如く恥かしさで岩戸にすすつとかくれ入るのと違って、何度も何度も這い廻る如くに、作物を廻つて終了、最後までどんよりした気分が漂い、私の気分にはあわなかつた。屋嶋は千五郎氏的那須ノ語が実によかつた。

次に観世会夜能であるが、いつもこの会はいい番組で、自由席だから学生券七百円で、京都観世会館では珍しく早い者勝でいい席がとれる。大体、一般の能会は、開場三十分前に行けば、いい席がとれるはずである。来年十一月二十日の夜能は、恋重荷、俊寛とあり是非とも見たいものである。

さて今年の中には、正尊(翔人)、井上嘉久があつたが、嘉久氏は体格もりつぱで、安宅、正尊などには向いていられるようだ。しかし彼の仕舞はというと、きまつて松風であるのだが：：：。起清文

が出るときは、例え誰がシテ方でも見ぬことに決めた。お金を払つてまで、腹をたてに行く気にはなれぬから。「半菰」鍬之丞氏はさすが本三番目の位を見せてみごとすぎが無く全体に枯淡の美があつた。僕は枯れた美しさの方が好きだ。師範の舞囃子「実盛」も枯れてむだなく老将の風格あり。

そして今年最後は、十二月十三日の大槻清韻会の「葛城、大和舞」宇治先生。本当の呼掛とは、あのようなものか。雪笠をいただいた女性が橋掛にあらわれると、舞台一面、真白になった気がした。位とはかくの如きものかと、今年最後の能を心ゆくまで堪能したのであつた。

以上書き出して書き終わるまでに私の舞囃子も、何とか大過なく舞い終わることができた。申し合わせから本番までは生きた心地がしなかつた。申し合わせのとき、一人、夜の暗い誰もいない見所を前にして舞っていると暗闇に吸い込まれる如き気持がして不安でたまらなかつた。大槻の能舞台は始めてではなかつたのだが、最初はあまりの大きさに感覚が狂つてしまい、舞台のまん中がどこかをつかむのに精一杯だつた。以後能舞台で舞囃をなさる方は少くとも一回はその能舞台で事前に舞われるべきであらう。大槻の如く見附柱からワキ柱まで行くのに二十歩近くも要するような大きな舞台などは特にその必要がある。

以上、自分のことばかり書いてきたが、最後に書き添えておきたいことが一つある。それは見所の礼儀である。それは素謡会等では最も重要な事であるのだが、能を生かすも殺すも見所次第である。その見所の礼儀がこの頃、非常に悪くなつてきている。心したいも

のである。

1 以上

鉄輪を見た。あまりいい感じがしなかった。女の悲しさを、最も醜い形で表現してあるからだろうか。今にもくずれて泣き伏してしまいたい。彼女の心は彼女にとって真実であり、そんなに思い、そして憎まねばならない彼女の心と姿は、私を変る気分にした。人間の造った美は、倫理的である故に美であると思う。また真実である故に美なのだ。

能を単なる古典芸能として、とらえてはいけないと思う。歴史的にどうか、客観的にどうかとはいえない。芸術は客観的に見ても芸術たりえない。倫理的でなければ、それは芸術とはいえない。芸術は個人の次元での問題であり、その美は自我を持った人間の中で初めて美となるのだ。世阿弥自身の生き方として、彼の内なるものをいかに表現するかにとり組んだ一個の人間性が、私達の生き方、日常性も含めた私達の生き方に、いかなるかわりを持つのか。そして私自身が、どう持たせようとするかということは重要な問題だと思う。さらに、この個人の次元のものがその領域から脱して、文化とどうかかわるのか、また私達は、どうとらえて行ったらよいのだろうか。山崎正和が言うように「人間がなにかしら自分を生き越

えるものをつくりたいとする懇願から生まれるもの」を文化とするなら、私は能をどうとらえていったらよいのかを、今度真剣に考えて行きたいと思う。

謡曲にみえる特殊な発音について

B 22 山口 剛

謡曲の中には、我々現代人にとっては奇異な感じのするいくつかの発音があるが、ここでは (一)「母」 (二)「仏前」 について若干の考察をすることにする。

(一)「母」——何故「ハハ」と発音しないか。

平安時代末期に、語中・語尾のハ行をワ行にして読む習慣が形成された。こうしてできた音を「波行転呼音」と言う。殆んどこの単語はこの習慣が現代まで続いている。

しかし、「波行転呼音」ができて後、再び、ワ行からハ行へ戻る傾向が見られる。

従って「母」の発音の仕方は ハハ↓ハワ↓ハハ と変遷しており、謡曲においては、中世の発音「ハワ」を復元していると言

口「仏前」——何故「ブツゼン」と発音しないか。

日本語の語尾は必ず母音であるので、日本人は子音で終る外国語の発音には苦勞しているのであるが、外国語を外来語として日本語に取り入れるときには、語尾の子音に 「」 または 「ロ」という母音を添えて発音し易くしてきた。

これは英語の日本語化であるが、語尾が k・t・p である古代中国語の日本語化にも同様な操作が行なわれた。

「蝶」の旧かなづかい「てふ」はその名残りともみられる。しかし、語尾が t であるものは、中世にはまだあるいは t となっておらず、古代中国語の漢字音をそのまま (…t) 発音していたのである。

故に、謡曲において「仏前」を butuzen ではなくて butzen、と発音しているのは、中世における日本人の発音を復元していると言えるのである。

以上の考察により、謡曲では、中世日本人の発音を復元していることが明らかになったが、『清経』の最後にある「仏果」などのツメルについては わからない。諸先輩の御指導を頂きたいと思っています。

| | |
|---|--|
| <p>本と シャングリラ</p> <p>宝盛館本店</p> <p>阪神御影駅南 TEL(84)1145代</p> | <p>海外旅行 周遊券発行 団体旅行 ゼミ旅行・合宿 新婚旅行 …… 旅の事なんでも</p> <p>全観ツーリスト</p> <p>阪神電鉄御影駅前 (85)0645 (81)2461</p> |
|  <p>＜団体予約うけたまわります＞</p> <p>神戸・阪急山側＜三映前＞電話(33)1255</p> | |

自由投稿

ちゃっ こうゆうど

B 20 米 田 耕 造

世の中とは。面白いものですね。実に。面白い。そう。僕は。悲しいのですよ。目が。うるんできて。もう。涙ぐみそうなのです。でも。そこまでなのです。涙ぐみそうになったときに。僕は。少し腹が立ってきて。涙を流しそなつたのです。どうです。実に。うまく出来ているでしょう。僕は。わかつたのです。何が。それは。だめ。教えるわけにはいきません。僕は。本当にはわかつていないから。面白いんです。そうなのです。寂しい笑いが。口もとに寄せてきます。どうして。こう。うまく行かないのでしょうか。面白い位に。不安が。襲ってきます。うまく行くのかしら。希望が。少しぐらい残っているだろう。という希望が。あります。うまく行かしたいなあ。いや。行かせて見せる。こういうのを。銭ゲバ型思考法と申します。意地。というのもあるですよ。私一人でもいいから。ウツハ。と喜びたい。でも。一人で。喜ぶことはできないのですよ。私達は。うまく出来る。というか。出来ていない。というか。い

ろんな意味で。狂人になりたい。否。もう少し違った型の。狂人になり

なりたい。何故って？皆様。狂っていらっしやるし。あたくしも。もう。狂わさしていただいでるからですわ。でも。それが。正常な人ですよ。信じる事が。必要なのです。自分は。正しく狂っていると。そう。信じる事が。狂う事。信じられ。狂える。ということ。もう。狂っていること。なのです。どうなってるか。わからなくなってしまう。というの。一つの狂い方。なのです。心配しなくても。よいのです。本当に。うまくできてるものです。この世の中は。実際。気が。狂いそうな位です。でも。正しく。気が。狂うことは。非常に。難かしいことなので。僕には。うまくできそうにないことに。思えます。これが。世の中。うまく行かないように。うまく行っている。あるいは。うまく行くように。うまく行っていない。こと。のあかしなのです。面白い程。面白い。ですね。実際。笑っていいのか。恐れていいのか。悲しんでいいのか。でも。やはり。希望は。あるのですよ。



友人礼讃

P 20 中 村 久美子

思いもよらなかつた貴女との出会い：：あの時、貴女は、ピラ配りをしていました。この前、ふるさとへ帰った時、貴女のうわさは、聞いていました。大学紛争の闘士と恋愛をして、今は入獄しているその人に、さし入れをしているという話や、大学を中退した：という話。それは、私にとって、大きなショックでした。貴女は、K高校初まって以来の才女：：私は、貴女が現役で東大に入った時、あの小さな町が貴女のことゆゑに揺れたのを、今も忘れることはできません。貴女は、勉強だけでなく、書道も、絵も、珠算も一番でした。私は、おとなしくてひかえめな貴女が、とても好きだったのです。それに、貴女は、試験前でも、遅くまで、私達の新聞部の用事を手伝って下さったり、不器用な私に、根気よく、編物を教えて下さったりしました。私は、貴女に尊敬の念を抱いていたものから、それがよけい、私をきこちなくさせて、何でも話し合える：という友達関係には、なることができなかったように思います。とにかく、高校卒業後、東京と、大阪：という具合に離れてしまし、最初のうちは続いていた文通も次第に疎遠になってしまいました。その上、最近、貴女に手紙を出したところ、貴女は、下宿を変わったそう、手紙が送りかえされてきたのです。そして、先日の出会い：。私は、東京の友人のところへ、休みを利用して遊びに行

っていたのですが、まさかあんな所で会えるなんて、思ってもみなかったことでした。話したいことは、山ほどあったのですが、貴女の、何か、一途なものを思わせる雰囲気にもまれて、何もいうことができませんでした。私は、何をしても、貴女にかなわないと、初めから思っていたので、貴女が私よりも、はるかに上をいっていることを見せつけられても、それをみじめだと思つたことは全くなく、むしろ当然だ：と思つていました。それなのに、貴女に、偶然会つたあの時、：質素な服を着て、黙々とピラを配っている貴女をみた時、：私は、自分がとてもみじめだ、と思つたのです。本当にそう思つたのです。毎日を一生懸命生きる：：貴女よりも一生懸命生きる：：そういう可能性は、私にもあつたはずなのです。それなのに、私はその可能性をも自ら放棄して、適当に生きてきたのです。その上、私は、貴女のうわさを聞いた時、何か忠告してみたことを貴女に言おうと思つたりしたのです。入獄している人に、さし入れしたり、大学を中退することは、世間一般の人がいう、いわゆるエリートコースからは、離れてしまうことかも知れません。でもだからといって、そういう道を選んだ貴女に対して、私は、何を言うことができるでしょうか。私のように、何に對してもひたひたひきになることができず、まるで冷たい石の上にすわって、過ぎゆく人々をただ見ているような：そんな人間が、何を貴女に言うことができるでしょうか。「入獄している人なんか忘れてしまいなさい。」こういういふよいのでしょうか。こういういふ、私は、常識のある人といわれるのでしょうか。一人人間の生き方とは、真の価値とは何なののでしょうか。私は時々思い出しています。「かけおりの初夏の坂道さわさわ

と、なびく黒髪、海のまぶしき。貴女が即興的に作った歌。私達は、よく皆と妙見山に登り、瀬戸内海を眼下に見おろしながら、歌をうたったり、写生をしたりしたものでしたね。その妙見山の桜も、もうすぐ美しい花を、咲かせることでしょう。厳しい冬も、もう終わりなのです。私も、貴女から、春の便りがくることを、とても心待ちにしています。

きょうなら

サークルロン

T 22 長 沢 洋 一

僕は、わざと髪をぼさぼさにして、まるで変てこな恰好で飛ぶようにして三宮を歩く。そして急に立ち止まり、パッと向きを変え、また、そそくさと歩き出す。僕のこの様な仕事も一向に人目を引く気配がないので、皆が腹立たしくなる。それでサングラスをかけてみる。これも駄目らしいのでついにステッキを持って歩いてやった。今日は三宮で目立ってやろうと思いつつ、目的を果たすことなく、ショボクレテ帰る時、ふと、クラブのことを思う。だってクラブには確かでもあの小さな世界に影響を及ぼすことができる。空まわりする必要がない。必ず何か響く。素晴らしい所である。と思っている。でもそこ一つ一つの落とし穴があったのです。途轍もなく深い深い落とし穴。自分が影響を及ぼし、また及ぼされやすい所であるからこそ人間が既成化されてしまうのではあるまいか。あの広い世界の中で



思いきり、勝手気儘に暴れ回った頃から、やがて、あの広い世界のことは忘れてしまい、この小さな世界だけに気を取られ始め、ついには手足を縮こめていなくてはならない。だってちょっとでも動かしみようものなら、小さ過ぎて……。

だからかは知らないけど、僕は近頃あの心地よい孤独をもとめて人込みの中を彷徨うことが多くなったのです。



酔い醒まし

E 19 根 岸 義 明

下宿への帰り道。学生会館の水銀灯の光の中に入った。——いっただったろうか。このアスファルトの上に坐り込んだのは。凍てつくような星空の下に……。

ああ、笛の音が聞こえる。軍靴のような足音と共に。ヘルメット部隊。ゲバルト。ステイルパイプ。——友よ、はやまるな。民青よ、日共よ、おまえたちは、なぜ我々の闘争を我々から奪おうとするのか。——あ、メガネが砕ける。飛び散ったレンズの結晶。水銀灯がぼんやり輝やく。

「皆の上の我が世界……グワルシャワ労働歌がかすかに聞こえる。友よ。共にたたかっていた友よ。私は封鎖には参加できなかった。そしてあの封鎖の翌日、我々を結びつけていた六甲の旗は焼かれた。自分ではどうしようもない流れ。私は転びキリシタンか。——。有志連合。イデオロギーを越えて私は学部改革案を作った。作った瞬間、私から離れていった。そして体制の枠の中で今は眠っている。むだだ。ハベルの塔よ。」

私は何を求めていたのだろうか。自由。反抗。解放。自己の存在の瞬間的認識。それは生きている喜び。——三月一日の夜。封鎖の前日。学部改革。U・S・A。卒業論文。……みなその瞬間のため。でも、すぐそれは思い出となるのだ。インタナショナルの歌とともに。

——気がつくくと六甲台の正門まで来ていた。港のネオンの海。酒。酒か。

思うこと

P 19 岩 本 美代子

私が風韻会に入ってよかったと思うことの一つに、能を楽しく見ることができるようになったということがある。はじめておもしろいと感じたのは葵上だった。葵上に対する嫉妬をおさえきれなかった六条御息所の生霊が扇を使って葵上を打つ、その動作の激しさ、「打ち乗せ隠れ行こうよ」の詞章に合わせて、今まで着ていた唐織を被ぎ、鏡の間にかげこむときの迫力等に魅力を感じた。それは、今まで何の動きも示さず、静そのものであったシテの激しい動作に驚いたともいえる。その後、藤戸では、前シテに権力の前の無力な

庶民の姿を見、卒都婆小町では、シテの後姿から何ともいえない寂寥感が肩のあたりに漂い、舞台の照明が一段落とされたように感じた。今年になって前から見たいと思っていた道成寺・翁を見、プロであり能を演ずることに慣れているはずの演者が非常に緊張しているのを見て、今までは違った感動を覚えた。

思うに、能は、こちらが働きかけるのでなくては、その魅力は理解できないものだと思う。能をおもしろいと感ずる時、それは今まで続いていた静が破れて、動に移るその一瞬にあると思う。その一瞬をとらえるには、観客は絶えず緊張している必要がある。この観客に緊張を強いるという点が、現代人と能を疎遠にしている原因だと思う。しかし能を楽しむのに苦勞があればあるだけ、その魅力はすばらしいものであるといえる。私が能の魅力を発見できたのも謡曲クラブである風韻会に入り、能に親しむ機会が数多くあったおかげである。社会に出ると謡う機会は少なくなるだろうが、能だけは、できるだけ見に行きたいと思うこのごろである。

感慨無量

P 19 加 嶋 文 子

私にとって風韻会の思い出は、みんな楽しいものばかりです。

何も知らない一年生の頃、説明会に無理矢理引っぱられ、謡を練習させられた時の恥かしさ、でもそれも風韻会の雰囲気を楽しむに打ち消され、とうとう四年間が過ぎてしまいました。

苦しんできたらよかったのにと、今四年間を終えて感じさせられています。何故なら、能をみても愉しみはもっと大きいでしょうし、自分が精一林やったという喜びも得られたでしょうから。

友人礼讚

P 19 賀 川 美 恵 子

もう卒業だなんて、もう二才だなんて、ああ、信じたくないなあ。大学での友人達や風韻会の人間ともうそんなに会えないなんて、ホントつらいものですね。懐古主義者ならぬ私でさえ、四年間楽しいことばかり。風韻会の一員としての生活もあったのでしょうネ。宇治先生、諸先輩、同輩、後輩の皆さまにはお世話になりました。感謝して居ります。

タデクウムシモスキキとは至言ですね。それがなければ、世の中おもしろくないし、これ又、それでいいんでしょう。一方、世々の人間ってものは、これ又おもしろく、行動心理学的に観察すると小説以上の虚構の存在を発見し、そこに人間のおもしろ味とか、もの哀しさとか、恐さとか、人間の悲劇も喜劇も全く紙一重なもので、未だ自然より人間の方に興味を持った四年間でした。

風韻会の人間もすべて個性に溢れすぎているというか、風韻の人間の中に居るといっただけでおもしろかったですね。全く未知の謡や仕舞に興味を持つと同様すべての面で風韻会は興味深かった様にお

教養から石段を登り、フウフウいながら部室に着くと、怖い先輩が待ちかまえていて何度も何度も同じ箇所を直され、私なんかとうてい上手になんかなれないなどと思いつめたことも度々でした。それでも練習が終って、みんなと一緒に帰るときは気分がすがすがしき、それに夕焼けの色がきれいだったこと、木々の緑がなんとなく、さわやかで落ちついてみえたこと、街のネオンが生き生きと輝やいていたことなどは決して忘れられません。

私は練習には、特に後半、怠りがちでしたし、謡や仕舞の真髄にはとても近づけませんでしたし、わずかにしる理解を得たという自信はありませんが、やはり私にとっても、謡や仕舞は心を鎮め、気持ちを落ちつかせるものであったことは確かです。この意味では、合宿は貴い経験でした。一週間なりを練習に明け暮れる(いえ、トランプで明け暮れるかもしれませんが)ことで、自分の心の中がキチンと整頓されて、何事も冷静に前向きな姿勢で対峙できるようそんな自信が自分についてくるようでした。

風韻会だけではないでしょうが、素晴らしいのは人間関係でした。練習はきびしいけれど親身になって相談のって下さった先輩と宇治先生、無責任でわがままな私を引っ張って下さった19回生の諸氏・後輩の方々にはすっかり疎遠になりましたが、御面倒をかけました。私が一番感了されたのは、この暖かい仲間意識でした。(誰か、コンパではないかという人があるかもしれませんがね。)

いい声が出なくて悩んだ、正座が苦しかった、仕舞がなかなか上達できない、こんなことはあたり前の苦しみでしょう。苦しまずに到達できる道なんかありますまい。私も途中で坐折などせず、もったもええです。大体私の大学生活は、学問はさておき、まず人間を第一にして、その人間の質量を測ったものです。お陰で、四年間で最後に残った私の人間関係は、満足出来る人間ばかり。思想や人間性に共感しても、更にその奥で共有する一点を持たない人間は、どうしても真の質量なる友情を感じないため無関心という態度で接し、一方、その共有点を持つ人間とは、その存在に死ぬまで存在し得るものです。これは男女を問わないのですが、世間一般では、女同志の友情は成立しないとか、男女間の友情もないとかが通説となつていますが、それさえあれば、アーチ型の均衡が保たれるもの様に思えます。プラトニッククラブは存在し得ないと断言する人間は実に数多い事。そういう人間は、現代文明に犯されている一面があるのでしょうね。世間での男女間の悲劇は、友情の質量と恋愛の質量を測り誤まり、かつプラスアルファのせいなのでしょうね。

「放浪」、実に魅力的、かつその響き。放浪出来る人間と、一方思いもよらぬ人間が幸福なのでしょうね。人間の絆を断ち切る為かそれともそれを求める為か、漂う中での安定性に酔い痴れる為か、生きるという事は素晴らしいのか。鶏の鳴き声から偽瞞が起きて以来は唯、思想や人間性の更に奥の暗闇の中の奥を感じ合える人間こそ正に自分にとっての必要な人間となるわけです。しかし、私に關して言えばそういう人間に恵まれた大学生活を満喫し得る事が出来たのは非常に幸せに思い、かつ、風韻会の人々の中で自分の言いたい事の出来る雰囲気等々：：実に大切に切羽詰った事態ですので、ここで終りといたします。

今年の活動を顧みて

E 20 福田 啓 介

去年の歓送会の席上、今年の課題は、「大学紛争のあおりを受け、混乱したサークル活動を正常なレベルにもどすこと」と述べたが、一年の活動をふり返ってみると、まず一応その目的は達成されたと考えられる。しかしながら、現象面では正常に運営されたが、その過程において問題はなかったであろうか。私は、風韻会の体質がしだいに変容しつつあり、しかもそれが危惧すべき「同質化」の方向に進みつつあるのを感じる。

従来からミーティングの際、しばしば討論されてきた、「サークルに何を求めるか」という問題がある。一般的理念として、「日本の伝統芸術たる能を通じ、部員の人格形成をはかる」というのがあげられよう。ところが部員個人々々にとってはその目的とするところに差異があり、その主なるものは次の三つのタイプにわけられる。第一のタイプとして、前述の理念をもって能を理解するため練習に励み、それを通じてより良き人間関係を保ちながら自己の人格形成に役立てようとする者。第二のタイプには、能の理解を助けるための技術をマスターすることを一義的に考え、部員相互の人間関係を

余り重視しないとする者。第三のタイプには、第二とは反対に良き人間関係を重視し、技術の習得には積極的でない者。このように異なる性質を持ち、しかもその異なる程度にも差がある個人が存在する組織を運営するにあたり、いづれのタイプを選択するかという大きな困難にぶつかった。理想としては当然第一のタイプを対象としてサークル運営をすべきだとは思いますが、テイクオフ（離陸）の段階で技術習得を重視せねばならず、それでは第三のタイプが多いと思われるジュニアの部員を引っぱっていくことができなくなる恐れがある。かくて、技術習得と人間関係のどちらを重視するかという、ある意味で低次元なディレンマにおちいったのである。最近、部員の数が往年にくらべて減少の傾向にあるのを顧み、どうしてもジュニアを対象として運営する傾向になってしまった。ところが、残念なことにはこの方針が徹底しすぎたのかシニアにも技術習得を軽視する傾向がみられ、これは他大学の連中に、「神大は実力が低下したのではないか」と言われるところにもあらわれている。

関西学生能楽連盟での活動報告

B 20 山本 秀人

一、参加行事

- | | | |
|-----|------------------|------------------------------------|
| 三月 | リーダーズキャンプ | 参加者一名 |
| 四月 | 月並会 | 参加者三名 |
| 六月 | 春季大会 | 連吟二番 仕舞三番 合同連吟一名 参加有志連吟一名 |
| 七月 | 合同能研修会（於学館第三集会室） | 参加者五名 |
| | リーダーズキャンプ | 参加者二名 |
| 九月 | 合同能研修会（於六甲台教官食堂） | 参加者四名 |
| 十二月 | 秋季大会 | 仕舞四番 舞囃子一番 合同能地謡方二名 一年生合同連吟二番に十名参加 |
- （学連委員のみ引継十二月ですので、四十六年に入ってからからの活動報告は行ないません）

二、関西学生能楽連盟

加盟校

神戸商大 神戸大 甲南大、神戸女子薬大 神戸女学院大 関学
大 武庫川女子大 関西大 近畿大 大阪歯大 大阪薬大 大阪女
子大 大阪市大 帝塚山大 以上十四校
他に大阪大（四十五年度は休連、四十六年度より復帰）なお大阪
医科歯科大学は除名になりました。

連盟員

約二百五十名（部員数三十三名の神戸大学は最大のクラブでした）
顧問その他は省略します。

三、学連の動き

榊井委員長（関大）の基本方針、組織の強化を軸とし、各行事に
対し実行委員会等組織し、運営の円滑化に努めた。さりながら、
執行部の熱意が空回りした感否めない。これは、各連盟校の態度
のあいまいさにその因を求められよう。例えば合同能である。春季
リーダーズキャンプで、合同能に反対したのは吾校のみであったのに、決行
決定後種々の困難が現れるや、夏季リーダーズキャンプでは、中止やむを得
ぬとし、積極的にその困難に向おうとの熱が見られなかった。（結
局、副委員長、実行部長が新潟まで出かける等々の事により問題が
かたずいた。）

連盟校の無責任による組織の問題は、以後も大きな問題となるで
あろうが、とにかく学連は、連盟校、連盟員相互の強固なきずなを
求めて運営を続けて行くだろう。

四、神戸大学と学連

一節の行事参加者の項を見れば分る如く、神戸大学は、各行事に
主体的にとり組んでこなかった。しかしながら、運営上の情報交換、
又クラブのマンネリ打破手段等々の様々のメリットを考えると、も
う少し積極的活動が、風韻会全体として望まれよう。今年度は、執
行部に志智くんが入ったので、連盟委員の苅田くんと共に頑張って
くれることと期待している。

以上

あしあと

昭和四十五年度

四月

8日(日) 松原先生十八回生歓送誼会 於学生会館ホール
教育学部の顧問、松原先生が退官なまり、十八回生共々お送りした。

宇治師範、藤井会長、米花、木村先生、井口、青木、伊藤、佐々木、高木、吉留、芥川、福山先輩の出席をいただく。

25日(土) 新入生オリエンテーション 於六甲台講堂

仕舞「田村」(川辺) 連吟「井筒」(女子)

4日(月) 三大学交歓誼会 於杉並能楽堂

24日(日) ~ 31日(月) 夏季強化合宿 於岐阜県上宝郡一重ヶ根温泉
雄大な日本アルプスの麓での合宿は、なごやかな中にも厳しい練習が行われ、学生生活の想い出深い一ページをつくった。菊地、北本、小川の先輩がかけつけて下さる。

練習曲「五番とじ中下」「養老」「敦盛」「清経」「熊野」「小督」「班女」「安達原」「小鍛冶」

12日(火) ~ 14日(木) 秋季強化合宿 於再度山大竜寺
十一月の秋季発表会にむけての強化合宿であったが一応の成果はあげられた。

練習曲「清経」「蟬丸」「善知鳥」

21日(土) 第六回秋季発表会 於学生会館ホール
主なる番組 舞囃子「芦刈」(武内)「胡蝶」(佐伯)「小袖曾我」(田中、谷村)「融」(中村)「忠度」(根岸) 素謡「清経」(シテ志智 ツレ木村 ワキ赤木) 連吟「三井寺」

舞囃子「吉野夫人」(武田) 素謡「船弁慶」(シテ木村、ツレ志智 ワキ赤木) 連吟「巴」(シテ谷村)「井筒」(シテ高島) 仕舞「吉野夫人」(下田)「草子洗小町」(菊田)「富士太鼓」(佐伯)「網之段」(中村)「船弁慶」(小田)

安村顧問、安藤、向浜、北本先輩の応援をいただく。

9日(土) 古典芸能発表会、於学生会館ホール

10日(日) 宇治風韻会 於大槻能楽堂

有志数名参加

29日(金) ~ 31日(日) ジュニア合宿 於再度山大竜寺

14日(日) 学連春季大会 於湊川神社

連吟「橋弁慶」(シテ中川 子方志岐)「箴」(シテ米田 ワキ山本) 仕舞「井筒」(岩本)「融」(賀川)

5日(日) 四大学交歓誼会 於学生会館ホール

舞囃子「敦盛」(川辺) 素謡「土蜘蛛」(シテ山口 頼光中川 胡蝶城戸 ワキ山中 トモ長沢) 連吟「天鼓」(シテ下田) 仕舞「鶴亀」(加藤)「吉野夫人」(志岐)「船弁慶」(横山)「高砂」(赤木)「清経」(志智)「桜川」(木村)「芦刈」(増岡) 合同仕舞「杜若」(小田) 合同連吟「船弁慶」

(武田)「頼政」(福田)「善知鳥」(谷村) 仕舞「野宮」(宇治正夫)

宇治師範、藤井会長、原、中島、小川、菊地先輩の出席をいただく。今回、学生中心の番組を組んでみた。

28日(月) 大学祭園遊会「狸々」開店 於六甲台学舎前庭
絶好の日和で客足が伸び、順調に行くかと思われたが、途中で全共闘の連中に屋台をこわされるというハプニングが起った。幸いにも屋台の外わくだけだったので、全員一致団結して応急修理をほどこし、営業続行。

5日(土) 学連秋季大会 於大槻能楽堂

仕舞「田村」(米田)「女郎花」(山本)「天鼓」(福田)「鉄輪」(河野)

今年からコンクールが廃止され、かわって合同能が催される。出し物は「紅葉狩」で、神大からは川辺、米田が地謡に出演。

本年度師範練習曲

「箴」「善界」「高砂」「融」「鉄輪」「鶴」「草子洗小町」「今浦」「俊成忠度」「殺生石」

幹事長就任にあたって

J 21 木 村 富士夫

幹事長をやることを引き受けた今は、何も言うことはありません。なった以上は、やるだけの事はやるつもりです。恐らく昨年度以上の事はできないのではないかと思っています。

ただ、幹事学年になったらやってみたいと思ってる事が少しあります。その一つは、あの伝統的な風韻時間なるものを打ち破ること。約束時間を守ることです。正当な理由なく刻々に五分以上遅れたものからは、反則金でもとったらと考えてます。たぶん、大反対がおこるでしょうが。次に観能会を多くすること。能の動きなどを知っておくことは、謡や仕舞をやる上で非常に参考になると思います。それから、またミーティングの時間が持てれば、観能した後の批判とか感想などを話し合ってみたいとも思っています。

でも、実際にどれだけやれるかはわかりません。今さら「ボク、やめさせてもらいます。」なんて言えないでしょう。できるだけのはやってみよう。それでダメならしかたがないさ、というのが私の現在の心境です。こんな事を書いてると怒る人もいるでしょう。でも、そんな人に私は言いたい。文句をつけて怒ってるだけなら誰にでもできます。実際にどれだけやれるかが問題なのでしょう。もっとも、私にこんな事を言う、いや書く資格はないでしょうが、文句でなく、建設的な御意見ならいくらでも聞かせていただきます。先

輩。同輩、後輩の御協力を、心からお願いいたします。みんなノシ
っかりやろうぜ!!

〔新役員紹介〕

- 幹事長 木村 富士夫 (法学部21回生)
- 会計委員 小田 裕美 (教育学部21回生)
- 学連委員 志智 敏一 (工学部21回生)
- 文化総部委員 長 沢 洋一 (工学部22回生)
- 城 戸 隆 一 (工学部22回生)
- 市 田 久 子 (教育学部21回生)

編集後記

◇ここに「風韻」第十一号をお届け致します。本号発行に際し、種々御協力を頂きました皆様方にまずもって深く御礼申し上げます。

◇「風韻」も号数を重ねて第十一号をむかえました。先輩との関係より密なものとし、より一層の風韻会の発展をはかるそのための一つにするという基本線に沿いながらも何んらかの新らしさを打ち出さんとしましたが、かくの如きものとなりました。編集子の努力不足をお詫び致しますと共に次号への先輩諸兄の御協力、御助言をお願い致します。

◇経費の都合上今年も名簿は変更分のみ掲載致しました。お手元の名簿を御訂正下さい。また、どうか勤務先や住所の移動がございましたらお葉書でもお知らせ下さいませ御願致します。

◇さて、今は大学の嵐も消え去り、もとの平安にもどったようにみえます。しかし、何か異質なものを感ずるようになりませんでした。

◇部室での謡。練習風景。しびれた足。それは私達が一年のときとかかりますまい。でもね後輩諸君よ、聞いてくれ。昔はきびしかったんだ。大学紛争のときは苦しかったんだ。それでも部室ではみんな友達。部室だけが大学砂漠のオアシスだったんだ。今は、いいな。君たちと一緒にいるとどっとも楽しい。僕達、歓送迎会では、はしゃいでいたけれど、本当はとってもきびしかったんだ。先輩の皆さん。きっと皆さんもそんな気持で卒業されていったのでしょう。卒業してからのクラブからの便りは風韻だけ。だから皆さん「風韻」をもっと可愛いて下さいね。(Y・N)

編集委員

- 根岸 義明 岩本美代子
- 武内 安雄 賀川美恵子
- 川辺 利招 高島 千明
- 田中耕 一郎 加嶋 文子
- 谷村 鉄郎 武田 京子

| | |
|---|--|
| <p>鉄板焼・食堂</p> <p>おはな</p> <p>阪急六甲山側 第一六甲センタービル</p> | <p>喫 茶</p> <p>ヴィオレッタ</p> <p>阪急六甲山側 電話(84)9550</p> |
| <p>コーヒースナック</p> <p>マウンテン</p> <p>神戸市灘区上野通3丁目 電話(87)1339</p> | <p>国玉公民館</p> <p>電話(86)0587</p> |